

はじめに

今回の研修で目指したものは、途絶えてしまっていた吹田市内の日本語教室のネットワークをつなぎ直し、「みんなが暮らしやすい吹田市」のビジョンを共有し、それに向かって連携を深め、また今後もつながり続ける方策を模索することであった。

問題は、協会職員の入替わりがあった際に、日本語教室の在り方を含めた諸々が共有されることなく、手探り、行き当たりばったりで事業が進められ、協会内はおろか、市内の各教室との連携のことはほぼ忘れ去られ、誤解と言ってもいい認識を持って、交流することなく途絶えていたことである。

吹田市国際交流協会では、「日本語交流活動宣言」なる宣言を出している(以下「抜粋」参照)。この方針のもとに日本語教室や協会の事業を企画・運営しようとするものは誰もいなかったと言っていい。そのため、方向性はばらばら、支援者から不満が出る、離れていく人も出る、といった状況であった。

日本語交流活動宣言

公益財団法人 吹田市国際交流協会
日本語支援ボランティア

吹田市国際交流協会と日本語支援ボランティアであるわたしたちは、日本語教室での定期的な交流活動を通して地域に暮らす外国人の日本語とそれにまつわる暮らしの課題に関わり、同じ地域に住む市民として相互にそれぞれの文化や生活習慣を尊重し合い、より豊かな多文化共生社会の実現を目指して日本語交流活動に取り組むことを宣言します。

1. 外国人が自立した社会生活を行い、多様な人々とコミュニケーションを図り、地域に根ざして自分らしく豊かに暮らせるよう日本語習得の支援をします。
2. 同じ地域に暮らす市民として寄り添い、教室参加者がつながり、よい関係を築き、情報交換や相談ができる居場所をつくります。
3. 活動を通してつながりの輪を広げ、地域のさまざまな人と交友を深め、だれもが安心して安全に暮らせる環境づくりに努めます。
4. 地域住民が外国人の日本語や暮らしの課題に関心を持ち、相互理解が深まるよう、地域社会に向けた広報活動に取り組みます。

2020年4月1日

『日本語交流活動宣言(2020(公財)吹田市国際交流協会』より抜粋

実践

問題提起

協会(職員のみなさん、主に局長)に対し、問題提起を行い、日本語教室のコンセプトとそれに対する現状、共生社会というビジョンを共有するためのコーディネーターの必要性を訴えた。

協会内だけでなく、吹田市内の日本語教室がつながり、みんなが暮らしやすい吹田を作るために、ネットワーク連絡会の再開と継続を訴えた。

教室見学、ヒアリング

皆さんの話を聞き、情報を共有したり、教室のこれまでの変遷やコンセプトについて話したりする中で、話す相手がないことも困っていることの一つだったことがわかった。話をじっくり聞くだけで、職員の認識を新たにし、事業の進め方、支援者や学習者とのかかわり方は変わる。話をすることの大切さを実感。

そうこうする間にも、職員の入替わりは発生し、やり直しとなる部分もあった。

ヒアリングは協会外の教室でも行った。顔を合わせて話すことはやはり大切である。

各教室に連絡を取り、途絶えてしまっていたネットワーク連絡会を再開したいことを伝え、皆さんから二つ返事です承を得た。

協会内でも、再開に向けて、出席者やコンセプトの説明等の調整や準備を行った。

吹田市日本語教室ネットワーク連絡会を開催

2024年1月19日(金)、約3年ぶりに、吹田市日本語教室ネットワーク連絡会を開催した。

運営・教材などさまざまな情報共有、意見、課題、コロナ禍の運営等、相互に質問するなど活発な交流があった。

協会が関わらなかった期間にも、教室同士で連絡を取ったりすることがあったようだった。嬉しい報告だった。

今後も、情報共有、研修や勉強会の開催等、継続して連携していくことを確認した。やはり協会が中心となって進めていくことが、連携の継続性につながると、コーディネーターの役割を再確認。



日本語交流活動宣言の学び直し

これについては今後少しずつ進めていく。まずは協会職員から始め、支援者、教室、と進めていく。研修や勉強会、また、交流会などを効果的に企画・実施していく。

市内の教室は、それぞれに方針があり、必ずしも「日本語交流活動宣言」と100%合致するわけではない。それぞれの立場を尊重しながら、共有する部分を増やし、連携していく。

地域日本語教育コーディネーターとして自身が大切にしたい視点

- ・対話。
- ・吹田市全体、ひいては大阪全体で共生社会、というビジョンをぶれずに持ち続けながら、それぞれの教室の立場や方針を尊重すること
- ・情報共有と交流、つながること、継続して連携していくこと
- ・吹田や吹田に住む人について知り、愛着を持って活動すること

実践において、難しいと感じたこと、今後に向け知りたいこと

- ・「地域日本語教室」について、みんなで同じ方向を向くこと。また、認め合うこと。
- ・学習者のみならず、支援者も職員もみんなが尊重し合い、自分らしく活躍できる居場所となるような教室を目指したい。学習者も巻き込みたい。
- ・「日本語教育の参照枠」や「地域における日本語教室の在り方」などを、職員や支援者との程度共有するか。また、共有のしかた。
- ・市の多文化共生アクションプランとの連携。

以上